５－７

主題	ユニットケア実現のため 24 時間シートを改善した効果について
副題	生活を知り、食事時間を変え、個別ケアの時間を創ることで見えてきたもの

キーワード１　ユニットケア	キーワード２　24 時間シート	研究(実践)期間	15 ヶ月

法 人 名	社会福祉法人　東京弘済園
事業所名	ケアハウス　弘陽園
発表者（職種）	吉野健太郎（介護職員）、大江裕貴（介護職員）
共同研究(実践)者	浅野美和（介護職員）、石原英里（介護職員）、山田三佳子（介護職員）、他

電　話	0422-43-1245	ＦＡＸ	0422-43-3318

今回発表の事業所やサービスの紹介	ケアハウス弘陽園は、開設は平成 18 年。三鷹市にあり、一般型 20 名。介護型 40 名の定員です。今回研究に取り組んだ介護型ケアハウスは、「特定施設入居者生活介護」の施設で、要介護 1～5 までの入居者が 10 名ずつ 2 フロアー、4 つのユニットで生活しています。平均介護度は、3.2 で、平均年齢は 92.3 歳です。

《1．研究(実践)前の状況と課題》

ケアハウス弘陽園は、ユニット型の施設として建設され、ハード面は整っているが、運営方法や職員の考え方といったソフト面に関しては併設の従来型特養の要素が多く引き継がれていた。

具体的には、①非常勤職員の比率が高く、常勤職員は夜勤も行う関係で、配属ユニット以外の勤務が多いこともあり、ユニットケアで重要視される職員の固定配置ができていなかった。②24 時間シートは、作成こそしていても、その目的や聞き取り項目など周知徹底はされていなかった。そして、ユニット入居者の 24 時間シートを横断的に分析することも行っていなかった。③職員は特養出身者が多く、従来型施設とユニット型施設におけるケアの違いを正しく理解しておらず、具体的にアプローチする試みが行われなかった。という課題を抱え、ユニットケアを行っているとは言い切れない状態だった。

《2．研究(実践)の目的ならびに仮説》

組織運営面では職員の固定配置を目指し、現場では 24 時間シートをあるべき形に近づけるため全面的見直しをすることにした。これにより、「ハード面・ソフト面両面でのユニットケア」を実際に行うための具体的な行動を開始し、入居者の暮らしを柔軟に考え一斉一律の従来の介護から脱却を図れるのではないかと考えた。また、介護型 4 ユニットのうち、利用者や職員の状況を考慮して 1 ユニットで先行して取り組むようにした。そこで成功体験を持ち、その後に他のユニットに波及させることで無理なく園全体でユニットケアを行えるようにしていくことを目指した。

《3．具体的な取り組みの内容》

①ユニットケアの研修参加。また、施設見学を行い、職員研修を開催した。

②取り組むユニットを 1 つ選定。外部施設見学に参加した職員を異動。

③その職員中心にまず 24 時間シート作成のための利用者への質問項目を弘陽園独自に設定。他職員でも精査し、それを元に聞き取り調査を行い24時間シートを新しく作り直した。

無断転載・複製を禁じます。

④模造紙に 10 名分のスケジュールを貼りだし、その 24 時間シートを基に職員が付箋でその時間にその方がしていること・望んでいることを書き込み、時間軸で並べて比較し、個人のケアの見直しや希望を盛り込む方法を探した。更に職員の各勤務の業務も同じように横並びに作成し、現実的にどの時間でどんなことができるのか検討し、新年度から実行した。

⑤2 ヶ月経過した段階で入居者と職員にアンケート調査を行った。

《4．取り組みの結果》

①24 時間シートを入居者の生活歴やご本人の言葉から作成することで、その人の生活や本来の希望が見えるようになった。そのような 24 時間シートが作成されることで、必要なケアや不足しているケアがわかり、職員の業務の時間と比較することで、それを行う時間がどこにあるのか時間をどう作るのかを具体的に考えることができた。

②個々の入居者の日々感じる希望や好みや考えにそった余暇が物足りなかったことが判明。業務の時間を整理し、各入居者に 30 分（1～2 回/月）個別に希望することに付添う時間を作った。

③入居者の望む起床後の過ごし方や、整容等のできることを自分の力でやっていただく介助を実現するには、朝食前の時間が今以上に必要であるとわかり、食事開始を 30 分遅くすることにした。

④アンケート調査では、朝食時間に関して入居者は、悪くはないといった感想だったが、朝の過ごし方にポジティブな変化を実感している方は少なかった。職員は、「朝の時間に急いで起床に伺わなくなり気持ちにゆとりが出て負担が減った」、「自分の力で整容や更衣をしていただく時間をとり易くなった」と感じていた。ただし、「早番が朝食後に行う業務が大変」という声も少数あった。

⑤②の余暇活動は、まだ回数が少なく入居者に覚えてもらえていない面があるが、総じて見ると「職員が忙しそう」という声が減っている。職員からは 30 分では足りないという声があった。

《5．考察、まとめ》

・24 時間シート見直しで目標に向け前進できた。

・1 ユニットで先行して取り組む方法は園全体よりチャレンジがしやすく、実践しやすかった。

・既存の業務を廃止するのでなく小さな工夫で時間を空けて新しいケアを創ることができた。

といった成果や効果が得られた反面、

・職員が意図や目指すものを正しく理解できず、職員間で取り組む姿勢に差が生じた。朝食を遅らせたのに早い時間から食事準備してしまう職員や、個別ケアを「やらなきゃいけない」と考える職員がおり、従来のケア・考え方から脱するまでには至らなかった。

・理念の共有はユニットケアの重要要素だが、本研究では先行研究でユニットケア浸透にどれほど期間を要したかの精査が足りず、進行のスケジューリングや具体的な到達点の設定が甘かった。理念の浸透やそのシステム作りという第一段階に注力せず取り組んでしまい、これが不充分だと上手くいかないことが改めて顕在化された。

・中心となる職員も少数で影響力に乏しかった。

以上の考察から、組織的に進行するため委員会を平成 28 年度から新設して活動をしている。この委員会が多くの職員に考え方等の面を発信することで、ユニットケア導入を加速させることを目指している。また、固定配置は課題として残っている。

《6．倫理的配慮に関する事項》

本研究発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被らないことを説明し同意を得た。

《7．参考文献》

荘村明彦（2014 年）『事例でわかる 24H シート活用ガイドブック』中央法規

《8．提案と発信》

今ある施設で途中からユニットケアを導入するには、1 ユニットで先行活動を行いそこで得た成果・効果を全体に広めていく方法や、24 時間シートを横断的に分析し既存の業務を整理しながら現実的に導入していく方法は有効であった。また、職員が納得・共有した理念、多くの職員が組織立って取り組むことが重要。年単位の計画的な理念浸透と、個人では影響を与えるのに力が足りないので委員会のようなチーム設立が有用と言える。

無断転載・複製を禁じます。